



江別市は大学が集まるまち。  
市内4大学では、約1万人の学生が学んでいます。

とは言うものの、  
「1万人いても、大学生は卒業したらそれっきりでしょ」  
そう思われる方もいらっしゃるかもしれません。

でも、近年、状況は少しずつ変わってきました。

地域に飛び出し、さまざまな活動に参加する「ジモ×ガク」で  
江別の良さを知ろうとしている学生が年々増えてきているのです。

また、昨年には3名もの学生が、学業と仕事を両立する  
学生起業家となり、自身の夢を叶えました。

そう、いま、江別市は

学生が地域に溶け込み、人と触れ合い、自身の可能性を探れる場所、  
夢や希望を自由に叶えられる場所になってきている。

そんな変化が起き始めているのです。

今月号の特集では、大学生の今と私たちの未来に迫ります。

特集

蝶々効果

Akiyama Hisara  
×  
Saito Hiroaki  
×  
Yamada Yoshiki



可愛井カフェ

"和×かわいい"をコンセプトに、もちもち食感のスイーツ、「パプレワッフル」を販売。道内を中心に、イベントなどにも出店中。ピンク色のキッチンカーが目印。出店情報は右QRコードへ。毎週木曜日：大麻銀座商街 ※変更になる場合あり



ボードゲーム&カフェ ELTERN

野幌松並町 2-7  
☎ 080-2867-3657  
【営業時間】15:00 ~ 23:00  
定休日：火曜日



元々ボードゲームは、海外、特にドイツで作られている物が多くて、子どもの頃からずっと遊ばれている物なんです。江別にも外国人観光客を呼べるようなイベントがあれば良いなど。秋山 私もやってみましたが、たくさんあります。たとえば、誰でも古着をシェアリングできるサービスのプラットホームみたいな物を作りたいですね。シェアリングなら高校生でもお洒落を手軽に楽しめるかなと思って。あとは、戸建ての家でシェアハウスをやってみたくて。物件が見つからなくてやれていないですが。

—悩んでいる人にメッセージを

山田 起業してみようと思ったのが、「とりあえずやってみよう」がやっぱり一番大事だなということですね。失敗は成功のもとってよく言うじゃないですか。本当にその通りだなと思います。失敗したら、何が悪かったかを考えて、

次に生かしていくというのが一番大事だと思うので、悩んでいる人はまず何か行動をしてみようかなと思います。秋山 思っていることはずっと発信していけば、絶対に誰か相談に乗ってくれると思うんです。全然関係ない人でも、SNSで「こういうことをやりたい」と発信したら「私の周りにこういう人いるよ」と繋げてもらえることもあるので。自分の希望は、どんどん発信していく事が大事だと思います。みんな小さい頃の夢をどこかで諦めちゃう段階があるじゃないですか。私はそれを無くしたくて、純粋に夢を見続けています。

齋藤 起業の種類ってたくさんあると思うんです。たとえばボードゲームの世界でも、カフェじゃなく作家さんとか。でも実際に商品を作るとなると一人では難しい部分もあるので、今後はそういう人の支援をしてみたいなと思っています。

—どんなきっかけで起業しましたか

齋藤 ボードゲームは友人と暇つぶしで始めたのですが、その世界観にどっぷりはまってしまう。札幌にあるボードゲームカフェに遊びに行ったとき「こういう世界があるんだ」と知って衝撃でした。その時からずっと頭の片隅に店をやってみようというのがあったんです。就職活動もしましたが、こっちの世界に突っ走ってしまいました。

山田 僕も自分がやりたいことを仕事としてやっていきたいと思っていて、一緒に起業することを選びました。秋山 私は大学3年生のゼミで、江別製粉の商品を使った、インスタ映えスイーツの商品開発をしていました。ちょうど商品開発を始める前に香港旅行に行っていて、現地でパプレワッフルが流行っていたのが印象的。日本でも香港スイーツが流行っているのに興味を持ちました。当時、道内でパプレワッフルを扱う店は1店舗しかなかったんで、これはチャンスだと思って、商品開発することにしました。11月に商品として完成して、翌月に

—なぜ在学中に起業したのですか

齋藤 「大学生がやっている」という話題性が欲しくて、どうしても在学中に始めたかったです。

ボードゲームカフェは札幌に競合店があるので、今江別で店を開いたとしても、話題性がないというか。札幌の店が有名ですので、そっちで遊んだ方が良いと思われちゃうかなと。

秋山 私は完全にタイピングですね。「やりたい」と思って、その熱量が高いうちにやりたくて。融資とクラウドファンディングで資金を調達して、思い立ってから6か月で開業しました。その頃はもう、開業しか考えられなくなっていて。ダラダラやってたら、たぶんできていなかったと思います。

—江別で今後やってみたいことは

齋藤 今後も江別に住み続けるので、まちおこしにも貢献できたらと思っています。

また、あくまで構想の段階ですが、外国人観光客にPRしたいです。



秋山 緋更さん(22歳)  
酪農学園大学4年生  
パプレワッフル移動販売  
「可愛井カフェ」店長

山田 佳生さん(22歳)  
北海道情報大学4年生  
ボードゲームカフェ  
「ELTERN(エルターン)」副店長

齋藤 弘瑛さん(24歳)  
北海道情報大学4年生  
ボードゲームカフェ  
「ELTERN(エルターン)」店長

近年、学生地域定着事業「ジモ×ガク」に参加し地域と関わる大学生も増えてきている。学生はどのような影響を受けているのか。関係者が語る。

—「ジモ×ガク」が始まって4年。学生にどんな変化が見られましたか

深瀬 いろいろなイベントを通じて学生さんと関わっていますが、間違いなく地元に対する気持ちというののは上がってきていると思います。

ジモ×ガクに参加するだけでも地元に対する気持ちを感じられますしね。

藤本 私が情報大学に赴任した6年前、情報大学では、山田君も所属していたボランティア部が大塚銀座商店街のお手伝いをするなど、地域との関わりが多少見受けられたのですが、他の3大学は立地もあって、アルバイトをする場所も、遊ぶ場所も、やっぱり札幌に向いていたような気がします。

4 大学で学生1万人とはいうものの、大半は札幌や周辺の市町村から通っています。

その中で、江別を全然知らない、4年間通っていても、飲み会を野幌で、3回やったことあるという程度で終

わってしまったのがせいぜいです。

そんな学生たちが、ジモ×ガクがスタートしたことで地域の事に関われるチャンスがすごく増えてきて、「関わってみたら楽しい」とか「熱い人がいる、すごく面白い」と感じているようです。

関わり方の密度には個人差があるでしょうけれども、江別や周辺の市町村を知らなかったという学生が、たとえば長沼町の夕やけ市の活動や、赤平や芦別のインターンシップに参加したり、観光施策の検証事業なんかに関わらせてもらって、その地域の取り組みや資源に関する認識を深めています。

今まで大学生が関わる機会や、知るチャンスが全くなかったので、そういうきっかけがジモ×ガクという地方創生のプログラムを通して準備できたというのが大きいと思います。



上 / 由仁町むかで競争に参加したジモ×ガクチーム

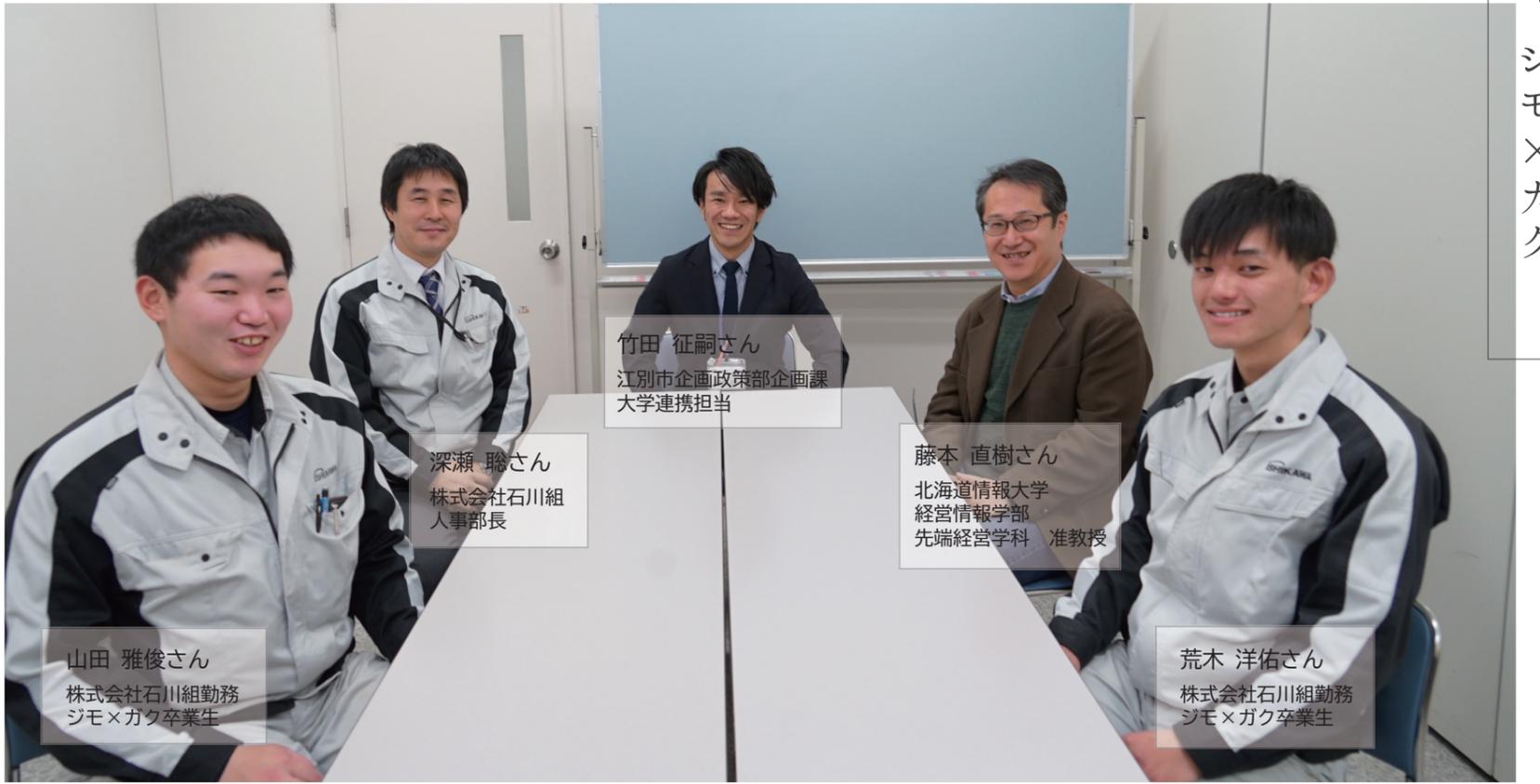
左下 / 栗山児童センターで、夏休み中の小学生と交流

右下 / 長沼町夕やけ市に参加した学生。笑顔で飲食物を販売



も増えていくのではないのでしょうか。深瀬 石川組も若い人が年々入ってきているので、今後も途切れずに入っていくと思います。

竹田 そのいう意味でも、地域に目を向けてくれる学生さんが増える



山田 最近ボランティアに参加したのですが、参加者が多く、そこに集まった人たちが、それぞれのやりた内容にすごくマッチしていることに驚きました。

江別の学生が江別でやりたいことができるという入口ができて良かったなと思います。

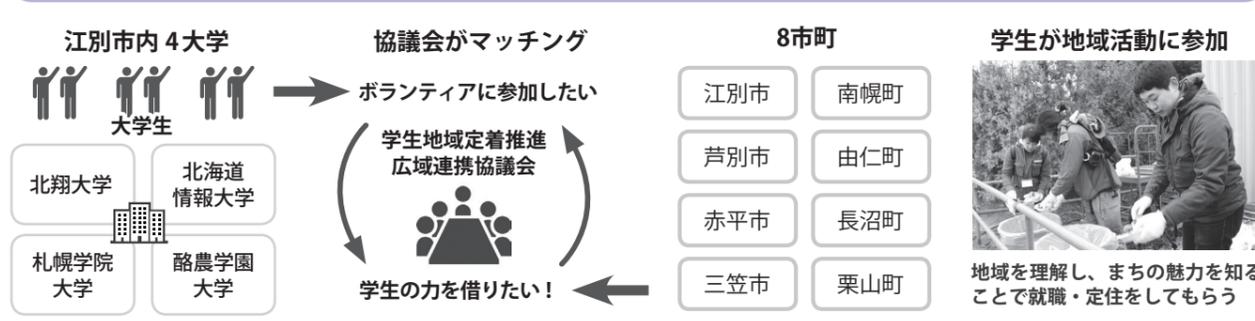
竹田 自分は4大学の出身ですが、学生のときはボランティアをあまり意識していなかったんです。当時と

比べると、今は学生さんが、積極的に参加してくれているなと感じます。当たり前前にボランティアに参加できる環境が整ってきているということではないでしょうか。また、学生さんも、漫然と参加して「自分の成長や学びにしたい」という考えの方が増えているのかなと思います。

山田 家賃などの物価も安いですし、スーパードも多くて生活には困らないなと思います。娯楽という面では札幌にはかないませんけど。あと、個人的には、地域に対して熱量をもっている人が多いというのが魅力でした。大学1年目にジモ×ガク関係者の方の働きを見ていて、自分も手伝いたいなというふうに思いました。「この人のために頑張りたい」と思える人が、江別にはたくさんいたな、と思います。そこが自分にとって一番魅力に感じた部分でした。

荒木 自分は高校の先生の勧めで大学に入りましたが、4年生まで何をしようか決めていなくて。そういうときに山田さんがキャリアサポート授業で「江別で建設の仕事します」と話されたのを聞いて、そういう会社が地元にあるんだと初めて知って、そこから就職しようと思いました。

大学生が地域・地元で学び、活躍する「学生地域定着事業」通称 **ジモ×ガク** はこんな取り組み!





地域と学生をつなぐ ジモ×ガク

—ジモ×ガクの今後について

藤本 ジモ×ガクは色々なプログラムを通じて、地域の環境や人の良さなど『江別の魅力』を学生がインプットする機会なのかなと思っています。

卒業後、一度都会で就職してみても、自力をつけたけれど、そこで暮らす中で、違う環境で生活してみたいとか、人間関係、ストレス、親の事などで戻らなくちゃいけないというときに、江別の魅力を思い出して、帰る場所として江別が選択肢として浮かんでほしいんです。

4大学の学生に中長期で江別のことをどこか記憶の片隅に残すというか、インプットして、江別の良さを心に残してもらい、必要になったときに江別



を選んでもらう。言わば仕込みの時期なのかなと考えています。

今後、大学教員としてそんな気持ちで協力していきたいなと思っています。

竹田 私も数多くの学生さんに、まず参加して欲しいというのがあります。

藤本先生も仰っていますが、今後Uターンの学生も増えてくると思うんですよね。

こういう活動を続けていくことで、江別に帰りたいと思ってくれる学生が、きつと少しずつ増えてくるんじゃないのかなと思います。来年度からは、内容をさらにアップグレードして、より地域に住むイメージができるような形にできれば良いなと考えています。

山田 とりあえず自分は江別で頑張っているし江別に戻って来ようかな」と思ってもらえるようになりたいです。

ジモ×ガクの後輩にも自分の姿を見て、江別で働くっていいなと思ってもらえるように頑張っていきたいです。荒木 僕も時間があればボランティア



などにも参加してみたいと思います。

—ジモ×ガクを通じ学んでほしいこと

深瀬 大学4年間という期間の中で、社会人になる準備ができれば良いのかなと思います。

準備ってなんなのかというと、社会人と学生とは考え方が全く違うんだという心構えです。

学生は、就職するために大学に行っていると思いますが、技術的な事よりも、社会人としての心構えを準備していく必要があると思うんですね。

そういう意味でも、ジモ×ガクは、とても良い場所だと思います。

みんなでつくる 未来のまち江別

令和元年10月1日、江別市の人口は15年ぶりに増加しました。しかし、全国的な人口減少傾向はまだ続いています。

人口減少社会では、経済や都市などが衰退していくと考えられており、中長期的に見れば私たちの住む江別市も例外ではないかもしれません。

ですが、それは確実に訪れる未来と言えるのでしょうか。

物理学の世界では、初期条件のわずかな差が、結果に大きな違いを生むことを「蝶々効果」と言います。

いま、江別には、さまざまなきっかけで地域へ関わろうとしてくれる若者が増えてきました。

こうしたわずかな社会の変化が、蝶々効果を生み、人口減少社会で予想される未来を大きく変える、そんな力になるかもしれません。

私たちも明るい未来を待ち望むばかりではなく、彼らとともに未来のまちを作りませんか。彼らの生き生きとした姿は、きつと良い刺激を与えてくれるはずですよ。

未来は、今の私たちがどう生きるのかに委ねられているのですから。

特集 蝶々効果





**特集への感想をお寄せください**

▼郵送・ファクスで送る  
〒067-8674 高砂町6 広報広聴課 宛  
FAX 381-1149

▼市ホームページから送る  
右のQRコードを読み込み、アンケートフォームから感想をご記入ください。



さまざまな年代の人や職業の人と話すというのは多様な価値観を与えてくれますからね。

色々な人と会って、色々な考え方を受け入れてみてから社会人になるの良いのではないのでしょうか。

また、たくさん失敗して、打たれてから社会人になってほしいというのがあります。

失敗しないで生きてくると、社会人になって失敗したときに立ち上がれなくなってしまう人もいるので、できれば大学生のうちに、どんどん攻めた事をやって、失敗してみてもいいですね。

自分で企画して、作って、失敗して、へこんで、そして強くなるという貴重な体験をして、社会に出る前に成長してきてほしいですね。

